

アルケイアー記録・情報・歴史・歴史一  
第一七号 二〇二二年二月 七七―九五頁  
南山アーカイブズ

杉浦英一（城山三郎）の  
キャリア選択の可能性と南山大学経済学部創設

林 順子

南山大学経済学部経済学科

---

The Possibility of Eiichi Sugiura (Saburo Shiroyama) 's  
Career Choices and the Establishment of the Faculty of Economics  
at Nanzan University

Department of Economics, Faculty of Economics,  
Nanzan University

HAYASHI Yoriko

*Archeia: Documents, Information and History*  
No.17 November, 2022 pp.77-95  
Nanzan Archives

はじめに

一．学生時代の環境と活動

- (一) 実家の環境と進学
- (二) 太平洋戦争での挫折
- (三) 東京商科大学予科から一橋大学本科へ
- (四) 一橋大学経済学部での経験―経済学と文学への没頭―

二．名古屋での研究者としてのキャリアと文学活動

- (一) 理論経済学の研究者としての活動
- (二) 新しい研究テーマおよび地元文学同好会との出会い
- (三) 『中京財界史』の執筆と影響

三．作家への岐路と南山大学

- (一) 南山大学からのオファー
- (二) 南山大学経済学部の設立前夜
- (三) 南山大学学長パツへの考える教員留学
- (四) 英一の海外留学への逡巡と小説家への専念

おわりに

# 杉浦英一（城山三郎）のキャリア選択の可能性と南山大学経済学部創設

林 順子

## はじめに

一九六〇年四月、南山大学社会科学部経済学科が再編され経済学部が創設された。この計画は一九五四年に始まるものの、母体であるカトリック修道会の神言会から許可が下りたのは一九五六年であった。その年に南山大学から教員のオファーを受けたのが、名古屋初の直木賞作家、城山三郎こと杉浦英一（一九二七—二〇〇七）である。

文壇デビュー前の英一については、彼自身によるいくつかのエッセイ<sup>〔1〕</sup>のほか、加藤仁、西尾典祐、植村鞠音ら、生前に仕事等で英一と関係した文筆家たちが、彼が遺した記録や関係者へのインタビューを整理しまとめた各評伝に詳しい。

しかし、南山大学からオファーがあった件は西尾による評伝で確認できるものの、学部名までは明らかにされておらず、南山大学内部の当時の状況にも触れられていない。本稿は、杉浦英一が文筆業に専念する一九六三年（昭和三八年）頃までのキャリアにどのような選択肢があったのか、その背景を整理しつつ、彼のキャリアに南山大学経済学部創設がどう関わったのかをみる。

## 一．学生時代の環境と活動

### (一) 実家の環境と進学

杉浦英一は、一九二七年、名古屋の中心部で、江戸時代に「碁盤割」と呼ばれる城下町の一角の朝日町（現・名古屋市中区錦三丁目）に生まれた。

父政之丞は、室内装飾業を営む「杉屋」を創設し、精力的に事業に取り組んだ。息子英一の命名も、政之丞が敬愛する洪沢栄一にあやかっただけだった。母寿々子は、愛知県立第一高等女学校卒の、当時としては高学歴の女性で、短歌を趣味としていた。この母の影響か、読書を好む傾向が強かった英一だが、商家の長男として生まれたからには「杉屋」の後継者となるのが順当な選択であり、一九四〇年、名古屋の商家の子息でも優秀な者が集まる名古屋市立商業学校に入学した。

### (二) 太平洋戦争での挫折

商業学校に入ったものの、その翌年末に太平洋戦争が勃発し、本校の学生は大同製鋼工場での労働に駆り出され、一九四二年にはそれが常勤となり、商業を学ぶ環境は失われた。

その中で読書家の英一は、杉本五郎の『大義』の皇国観に心酔した。名古屋大空襲を経験しながら一九四五年三月に商業学校を卒業した英一は、徴兵猶予のある愛知県立工業専門学校に進むが、自ら懇願して海軍特別幹部練習生に採用された。しかし、配属された広島県呉の海兵団で英一は、数ヶ月とはいえ、訓練から生活にいたるまで上官から虐待と呼ぶべき扱いを受け心身ともに傷を負った。同年八月の終戦後に帰郷した英一は、工業専門学校にはすぐに退学届を出し、大学に進学する道を選んだ。

このときの大学進学ルートは、二つあった。ひとつは、地元で名古屋高等商業学校を受験、卒業し、さらに大学を受験するというルート、もうひとつは、予科二年と本科（大学）四年がある学校を受験し、一度の試験で大学へ進学するルートである。英一は後者を選び、東京商科大学、後の一橋大学の予科に合格した。同大学は、一八七五年に森有礼が設立した日本初の商業教育機関で

ある商法講習所を前身としており、家業を継ぐ可能性のある英一としては、まず自然な選択と言えよう。

### （三） 東京商科大学予科から一橋大学本科へ

一九四六年九月、英一は、東京に移って大学寮に入り、読書続けながら哲学研究会での活動にも没頭した。研究会では、思想史を専門とする当時助教の鈴木秀勇に教わりつつ、マックス・ウェーバーについて激論したという。こうした日々を重ね、予科の二年間が終わりに進み一九四九年頃には、英一は虚無感から抜け出て再び社会に、中でも戦後日本の経済の立て直しに、関心を向け始めた。このとき、東京商科大学は商学部、経済学部、法社会学部を有する一橋大学に改組され、彼は己の関心に従って経済学部を選んだ。

家業を継ぐのであれば、経済学部ではなく商学部を志望するのが適当と思われるが、当時の実家の意向はどうであったのか。英一には年の離れた弟もいたためか、父政之丞は、一橋大学に入った英一が三井や三菱といった巨大企業へ就職する可能性を口にしたが、実家の事業承継を含めて、彼の卒業後のキャリアについて指示を出すことは無かったという<sup>3)</sup>。もし弟がおらず、あるいは父親の態度が違っていたなら、英一のキャリア選択も家業承継に傾いた可能性はある。

キャリアに関して言えば、英一は、本科進学と同時に特別奨学生にも選ばれた。これは、一橋大学が同大における研究者を育成するために各学年から優秀な学生一名を採用する奨学制度で、いわば大学の人材育成制度である<sup>4)</sup>。これに採用されたということは、大学としては、彼に経済学研究者の道を進むことを期待したとも言える。

### （四） 一橋大学経済学部での経験―経済学と文学への没頭―

とはいえ、英一の経済学への興味は突発的なものであった。予科時代に、研究会でウェーバーを読んだ以外は、一般教養としてマルクス系・理論系の「経済原論」を履修した程度であった。「予科時代には、他大学の文学部に移って、哲学か英文学を専攻し、それを職としようかと思ったこともある<sup>5)</sup>」とさえ、本人が述懐しているし、人気のあった理論経済学の山田雄三ゼミを志望するも、

志望する誰もが知るはずの前年度のテキストも知らなかった。「それほどまで経済学とは縁遠い生活」<sup>(6)</sup>だったのである。

彼が本科に進んだ一九四九年は、米ソ冷戦を背景に日本の復興を重視する政策に転換した米国が、日本へシャープ勧告を出した年でもある。経済学分野でも、ケインズの資本主義的理論とマルクスの社会主義理論が熱く闘っていた。同大の「経済思想史」担当教員、大塚金之助は、講義後の帰路の電車でたまたま会った英一との話が白熱し、「社会科学とはこの問題なんだよ」と、突然英一の胸をつかんだという<sup>(7)</sup>。英一にとつての経済学は、哲学、社会学と密接につながる学問で、実際、経済学にはその観点で研究する分野もある。

しかし、彼が所属した山田ゼミの研究手法は、それとは異なつた。テキストは、一九四四年に発刊された、ジョン・フォン・ノイマンおよびオスカー・モルゲンシュテルン『ゲームの理論と経済行動』であつた。ゲーム理論は、相互に利害関係のある人々が合理的意思決定をどのようにおこなうか、といった人間の思考や現象を高度な数学的手法で分析していくもので、本書はその先駆的な研究書である。分析に必要な数学を習得するべく、当初英一は、民間の数理教育機関である研教会館に通うほどの意欲をみせた。しかしやがて、事象を数字や記号で極端に抽象化したゲーム理論と現実社会が乖離しているのではないか、ひいてはこの理論の追究に意味があるのか、疑念を持ち、もつと「心を熱く燃やし、日本経済の現実に少しでも早く迫れるようにすべきではないか」と考えるようになった<sup>(8)</sup>。

ゼミをやめる決意をした英一を引き留めたのは、ゼミ担当の山田であつた。彼は英一に、社会科学とは、思想などと別に、現れる事実をただ事実として認識し、人を客観視することで人間の本質に迫る学問であり、人文科学とは手法は違えども、紛れもなく人間を扱うものである、と伝えた。経済学への認識をあらためた英一は、ゼミを続け、L.R.クライン『Keynesian Revolution』をもとにケインズ理論を再評価する卒業論文を完成させた<sup>(9)</sup>。

しかし、彼は、卒業年次の一九五一年になつても、経済学研究者の道に進むのを躊躇していた。当時の心境を英一は、「相変わらず数学に自信がなく、そうしたハンディキャップを抱えたまま、理論経済学で競うのは、気重であり、いまいまでもあつた<sup>(10)</sup>」と述べている。彼が理論経済学研究を継続したのは、その意義を理解したことに加え、山田の手柄に惹かれたことも大きかつた。

学部時代の英一の関心は結局、経済学以上に哲学や文学、文筆活動に向いていた。詩の同人誌に参加したり、詩集の書評などもおこなったりしていた。ゼミ旅行を休んで読書旅行をしていた英一が、その帰路で山田と遭遇してしまったというエピソードは、経済学と文学の間で揺れる当時の英一の状況を象徴している。

卒業まであと半年という一九五一年初夏、英一に、全く偶発的に人生の転機が訪れた。父政之丞が大病にかかり、その介護のため、名古屋に戻ることとなったのである。「家業は継がなくていいから、とにかく名古屋へ戻れ、と言ってきた」というから、彼の家業承継の可能性は、この時も低かったと言えよう。

その代わり、国立愛知学芸大学商業科講師（助手）の就職のオファーが持ち込まれた。英一はこれを恩師の山田に相談せずに決めてしまったが、晩年、彼は自身の行為が不義理であったと認めるとともに、もし山田に相談していれば同じ国立大学でも理論経済学の研究を進める環境が整っている名古屋大学を勧められたであろう、と推測し、ただもしそうしていたら小説家としての自分はいなかったかもしれない、とも語っている<sup>14)</sup>。

経済学研究者の道に踏み切れない英一の内面的葛藤と、父の大病と就職のオファーが重なって、彼は名古屋で、教員養成を目的とする愛知学芸大学の教員となった。

## 二 名古屋での研究者としてのキャリアと文学活動

### （一）理論経済学の研究者としての活動

勤務先の愛知学芸大学では、経済学担当は英一のみで、商法や会計学それぞれを担当する教員、また、哲学など他分野の教員で経済学に興味を持つ教員はいたが、専門的に深く議論する相手はいなかった。しかし、名古屋大学経済学部の水野正一の勧誘によって、彼は、経済学若手研究者の勉強会に参加し、理論経済学の研究を継続していった<sup>15)</sup>。

一九五四年四月刊行『愛知学芸大学研究報告』第三号〈社会科学〉への投稿「消費者市場に於ける厚生概念」までおよそ三年間、

研究成果の発表は、見つからないが、これに続けて同年一二月に「社会会計への問題点——ノルウェーの国民経済計算をめぐる——」『愛知学芸大学研究報告 第四号／社会科学』の投稿もあり、研究を継続していたことがわかる。恩師の山田雄三は、国民経済計算の研究分野において先駆的な存在であった。現在では全く一般的なとなっている、生産・支出・分配の三面からの国民所得の測定方法や、総量よりも各々の内部構成に注目した分析方法は、山田の大きな功績であり、弟子である英一の研究にもその影響が認められる。おそらく名古屋大学の研究会でも、英一は、山田の研究分野に関する発表をおこなっていたであろう。

## (二) 新しい研究テーマおよび地元文学同好会との出会い

しかし、東京を離れるときに山田は英一に、名古屋に居住する英一には最新の文献の入手が難しいであろうから、何か特殊テーマを見つけるようアドバイスをしていた。<sup>14)</sup>

教員としての講義をする際も、一橋大学で英一が受けたような理論経済学の内容では、教員養成を目的とする大学にはそぐわなかった。そこで、英一は、抽象的で専門的な学説よりも、実証的で歴史的な観点からこの地域の景気動向をみる「景気論」などを、講義で扱うことにし、資料調査だけでなく企業家や郷土史家らへの聞き取り調査も実施して講義準備をおこなった。そして、その過程で「景気不景気に対し、企業や経営者たちがそれぞれどう対応したか」を考えるようになった。新しい研究テーマではあるのだが、英一は、後にこの調査を「経済学」ではなく文筆に活用していくことになる。

その文筆および文学の面でも、英一は、新たな人間関係も築いた。豊橋在住の詩の大家、丸山薫とも、学芸大英文学科の知人を介して出会う機会に恵まれた。同好の士と読書会を開き、一九五四年、同人誌『くれとす』と『近代批評』に参加した。『くれとす』が文学書についての研究の場とすれば、『近代批評』は自らの成果発表の場であった。『近代批評』にはイギリス、ドイツ、フランス、ロシア各国の文学を専門とする名古屋大学、岐阜大学などの研究者が参加し、非常勤講師先の金城学院大学岡本秀男、また、南山大学文学部英語学英文学科教授の山根義雄も、創刊から加わっている。<sup>15)</sup>

このように、名古屋に拠点を移した英一は、勤務先の愛知学芸大学の同僚、名古屋大学の経済学研究グループ、勤務先や非常勤

先で繋がった愛知の文学者グループと関係を持ち、理論経済学研究だけでなく文学批評や文筆についての発表をおこなしながら、勤務先の講義のために地域経済史・経営史に関する調査を進めていった。

### （三）『中京財界史』の執筆と影響

英一が、地域経済史・経営史、特に地域経済を動かす企業家を調査した直接的なきっかけは愛知学芸大学での講義準備のためであらうが、当時の経済学研究の動向も影響したとみられる。

この頃アメリカでは、企業家研究が盛んにおこなわれていた。古くは、シュンペーターが一九一二年『経済発展の理論』で、国の経済発展の原動力として、技術、経営等の部門で革新を起す企業家（*entrepreneur*）の重要性を指摘した。その後、現実社会の状況と、資本財・技術を投入し労働力と結合させることで経済発展が実現するという理論経済学の乖離が認識されるようになり、非経済的要素、例えば、歴史、思想、文化などに注目が集まった。一九四八年に設立されたハーバード大学「企業家史研究センター」は、経済、社会、経営、歴史学の研究者が、人間の活動が経済成長に及ぼす作用について共同研究をおこない、一九世紀半ばの日本の近代化を促した原動力にも関心が向けられ始めた。<sup>18)</sup>

英一がこうした状況を把握していたことは、一九五六年刊行の『中京経済史』の冒頭の以下の記述でわかる。

最近アメリカで、『企業者史研究』という学問が盛んに行われているが、その中に、資本主義初期の経済人を（一）創意の人（二）模倣者（三）現状維持者（四）怠惰者の四つの群に分類している論文がある。この中、経済発展をもたらしたものが「創意の人」の活動と、それに伴う「模倣者」の行動の波であることはいうまでもない。<sup>19)</sup>

英一は、山田のいう「新しいテーマ」を見付けるため、経済学研究全般の動向にも注意を払い、その中で企業家史研究というものを知ったのかもしれない。

地域史や企業史研究に無縁であった英一が、知見を深め資料収集を進める手段は、以下の三つであった。

まず、名古屋公衆図書館での文献調査である。本図書館は、三井銀行名古屋支店長などを務め名古屋経済を支えた矢田績が離職後に創立し、一九三九年に名古屋市に寄付したものである。<sup>20)</sup>

つぎに、商業学校時代の同級生で義弟でもある、愛知学院大学法学部の林董一の示唆である。尾張藩法政史を専門とする研究者である林からは、主に、明治時代以降の一部の企業家のルーツとなる江戸時代の藩御用商人についての情報を得た。

三つめに、郷土史家や当時の企業家らからの聞き取り調査である。林の紹介をきっかけとして、英一は、高橋正照・湯浅四郎・船橋寛治・富田孝造ら名古屋の歴史研究者、郷土史家、財界関係者ら合計五〇名ほどと会う機会を得た。<sup>21)</sup>

この聞き取り調査が、英一に文筆家としての道を開くことになる。英一の調査活動を調査対象者から伝え聞いた中部経済新聞社が、英一に新聞連載を依頼したのである。かくして、『中部経済新聞』に、東海地方における景気変動と企業者活動を幕末から太平洋開戦に至るまでの七〇数年を五年ごとにわけて綴った「名古屋財界太平記」が、一九五五年五月から一月にかけて連載された。そしてこれをまとめた『中京財界史』上・下も、翌年二月に同新聞社から発刊された。<sup>22)</sup>

『中京財界史』は元々一般人向けの新聞連載であるため、論文ではなくむしろ文学的な様相を呈している。本書の記述や構成に關して、英一は、つぎのように述べる。

折柄、伊藤整氏が「日本文壇史」を『群像』誌に連載中であり、わたしは愛読していた。文学や文壇の動きを時系列で輪切りにし、同時期における主な作家の仕事や暮らしぶりをいきいきとよみがえらせる労作である。わたしは魅せられて読み続けながら、ふっと思いついた。こうした手法で、景気変動の各過程で、企業や経営者たちがどういう行動をとり、どのように経営を動かしたかを、時系列的に追ってみよう——と。<sup>23)</sup>

一九五一年一二月発行『群像』昭和二七年一月号に連載が始まった伊藤整「日本文壇史」には、確かに『中京財界史』の構成の

もとなつてゐるところが多い。伊藤は『日本文壇史』の序文にて、

本書に書かれてある多くの人物、事件、作品等は、それぞれ事実即し、拠り所のあるものである。ただ人物の心理的経緯については、私の推定を加味することによつて意味づけをし、現実感を与えた。また私は、ある時代の文士や思想家や政治家の行動が、みなつながりのあるものと考へ、そのつながりや関係や影響を明らかにすることに全力をつくした。また描かれてあることが私自身の目の中で一つの生きた姿となつてとらへられ、それがリアルなものとして読者に伝わるやうに、資料と事実の組合はせに考慮を払つた。<sup>(24)</sup>

これにならつた『中京財界史』でも、事実英一の推定を付け加え、創作された企業家の関係やイメージが語られており、結果、本書は事実と推測の混同を避ける社会科学の《論文》ではなく、文学的な《小説》となつてゐる。<sup>(25)</sup>

その一方、『中京財界史』は、英一の言葉を借りれば、「中京財界に於ける『創意の人』の歴史」に注目し、「国民経済的な視野との連携を図ると共に、往事の経済情勢や世相なども出来る限り描出」した、名古屋経済史・経営史を綴つたものの中では先駆的なものであり、学界にもある程度の影響を残している。例えば、英一は本書で、名古屋商人を江戸時代以来の御用商人（土着派）と近在から名古屋に進出した商人（近在派）と外来の商人（外様派）に分類したが、この分類方法を林董一が自書で紹介し、最近では『新修名古屋市史』第五巻も、この分類を利用して明治初期の名古屋財界を説明している。<sup>(27)</sup> また、研究論文で名古屋の企業家の業績に触れる際の参考文献に、本書が挙げられることもある。<sup>(28)</sup> 『中京財界史』は、限定的ではあるが、名古屋の近代経済史研究の進展に功績を残した、と言える。

『中京財界史』の刊行は、英一自身の将来にも影響を与えた。『中京財界史』の内容に対しては、実際に企業などで経済活動に従事する読者から、実情と異なり綺麗すぎる、との批判があり、英一は、実際に企業通の者と面談し、その中で「個（人間）」と「全体（組織）」の関係について改めて考えるようになったのである。伊藤整が『現代文学のテーマ』として『組織と人間の関係』を

挙げたこともこれに影響した。<sup>29)</sup> 英一のこのときの面談が、後に直木賞を受賞する『総会屋錦城』の執筆へつながった。

### 三三 作家への岐路と南山大学

#### (一) 南山大学からのオファー

「名古屋財界太平記」の連載がおこなわれた一九五五年、英一は出身校の一橋大学に内地留学し、産業連関分析や数量経済学の研究を進めてもいた。一九五六年発表の、アメリカの国民計画協会の主任エコノミストの「経済バロメーターと経済モデル」の翻訳や論文「政策模型の作成とその意味——コルム方式の問題点——」<sup>31)</sup>は、その成果の一部である。

この頃から、英一のものには、アジア経済研究所などの研究機関、文部省教科書検定官、そして複数の大学から就職のオファーが入った。<sup>32)</sup> 西尾(二〇一一)によれば、南山大学も一九五六年にオファーを出していたという。その年は、本大学が経済学部創設に大きく動いた年であった。

#### (二) 南山大学経済学部の設立前夜

冒頭で触れたように、南山大学経済学部の前身は、一九五二年創設の社会科学部社会学科である。同学科には社会学コース・経済学コース・法学政治学コースがあったが、一橋大学のように研究者を育成するというよりも、商業取引・銀行・会計事務・工業経営といった卒業後のキャリアを重視した教育がより意識されており、<sup>34)</sup> その点では愛知学芸大学に近かったと言える。三つのコースの中で経済学コースを希望する学生が増加するのを受けて、経済学部設置案が浮上し、一九五四年には、大学評議会が経済学部設置を承認した。このとき、教員スタッフは慶應義塾大学の協力を得る計画であった。<sup>35)</sup>

ただし、大学の母体である神言会の名古屋管区の会計検査をおこなう関係で、神言会本部からの許可が下りたのは一九五六年七月と遅れ、この頃慶應は商学部の設置準備にかかっており、教員を名古屋にまわす余裕はなく、南山大学は自力で教員人事を進め

なくてはならなくなっていた。<sup>36)</sup> 英一へのオファーは、これを受けてのものだったとみられる。

さて、一九五六年度において社会科学部社会科学科で経済学部門の科目を担当していた教員を『学生便覧』<sup>37)</sup> からたどると、経済学部門では二三科目の講義を開講しており、「財政学」「貨幣銀行論」を戸田正志教授、「簿記学」「会計学」を田中藤市郎教授、「商業政策」を斉藤隆助教教授、「経済学説史」を森茂也講師、「統計学」（学部共通科目）「外書講読」を伊藤孝一講師が、専任教員として担当していた。一方、「経済原論」「経済政策」「近代経済学」「国際経済論」などの一〇科目は他大学との兼任講師が担当しており、学部として独立するには専任教員の不足は明らかであった。

理論経済学を専門とする英一は、おそらく「近代経済学」の担当として期待されていたとみられ、一九五六年度にその「近代経済学」を担当していた非常勤講師は、当時名古屋大学経済学部助教教授の山崎研治であった。<sup>38)39)</sup> 英一への南山大学専任講師のオファーは、名古屋大学経済学研究会を通じてのことか、また、そこに同人誌『近代批評』のメンバーの南山大学山根義雄が一役をかけた可能性もある。

なお、南山大学の教員人事に、カトリック信者であることを考慮するかについては、当時議論があった。神言会は、神戸大学経済学部教授で信者の五百旗頭真治郎を中心に学部設置準備を進めることを期待していた。実際の人事はそれにこだわらず進められたが、カトリック信者が望ましいという空気はあったようである。英一は、一橋大学時代に大学寮の全焼によって一九四九年YMCAの寮に入り、一時的ながらキリスト教に魅了され洗礼を受け、<sup>40)</sup> また金城学院大学の非常勤講師を務めてもおり、プロテスタント系のキリスト教と若干の関係があった。但し、それがこのオファーに関連していたのかは不明である。

### (三) 南山大学学長パツへの考える教員留学

西尾によれば、南山大学から英一へのオファーには、三年は単身で留学するという条件がついていた。<sup>41)</sup> この留学制度を明文化した学内資料は見つかっていないが、社会科学部時代からの専任教員で経済学部名誉教授の斉藤隆助は、一九四九年から五七年まで初代学長として南山大学を牽引したアロイジオ・パツへについて、つぎのように語っている。

教員の留学制度も、当時は学長指名みたいな形でした。給与を三分の一減らすとかいわれたので私共のような世帯持ちはずめでした。(中略) 独身の若い方達が行かれました。選び方に注文をつけたら、「私の眼力に狂いはない」と言われてしまいました。<sup>44)</sup>

仮に明文化されていないにせよ、給与上の理由で単身者でないと難しく、かつ学長の意向が強く反映された教員留学制度があったことがわかる。

実際パツへは、経済学部が設立されたときのために、一九五四年一人の神父に留学を命じてもいる。それが後年、三代目学長となるヨハネス・ヒルシュマイヤーである。パツへは宣教師志望で経済学とは無縁だったヒルシュマイヤーに突然、経済学の勉強、さらにアメリカへの留学を言い渡した。ヒルシュマイヤー自身は、日本語習得も兼ねて国内留学を申し出たが、パツへは、日本人でさえ海外の研究を学ぼうと留学するのだからと許さなかった<sup>45)</sup>という。結局ヒルシュマイヤーは渡米し、一九五四年九月からカリフォルニア大学大学院で経済学の基礎を学び、一九五五年七月ハーバード大学大学院に入った。

先述のように、企業家史研究センターを擁する同大学はその分野における最先端にあった。先進国の技術を移入することで後進国が優位に発展できるという「後進性の優位」仮説を提唱したガーシエンクロンに師事したヒルシュマイヤーは、日本の近代化と企業家活動の関係をテーマに研究を進めた。そして、一九五七年日本に戻り、ハーバードに籍を置きつつ、南山大学助手、東京大学研究生としても教育・研究活動を続け、翌年修士号を取得し、経済学部創設の一九六〇年に博士号を取得して経済学部講師となった。彼の博士論文は、『*The Origins of Entrepreneurship in Meiji Japan*』として一九六四年に出版、日本語訳である『日本における企業者精神の生成』も翌年刊行された。

南山大学側からは「近代経済学」担当者として期待されていただろう英一だが、当時、彼の関心は企業家史にも向いていたから、もしも彼が南山大学経済学部任用されたならば、このヒルシュマイヤーとともに企業家史研究や名古屋の近代経済史研究の進展を早め、あるいは現在とは違う流れをつくっていたかもしれない。

（四）英一の海外留学への逡巡と小説家への専念

しかし、当時の英一にとって三年間の単身海外留学という条件は大きな壁であった。すでに英一は結婚していたし、そもそも当時は海外旅行者や生活経験者がまだ少なかったためである。とりあえず英一は商業学校時代の同級生に相談し、海外生活の情報を求めた。このときの英一は、南山大学専任講師への転職に、ある程度前向きであったと言える。だが、その同級生の話で英一に強烈な印象を残したのは、海外生活のノウハウではなく、当時の人気産業であった貿易商社の社員が過酷な環境に翻弄される姿であった。

結局英一は、南山大学のオファーを断り、このときの同級生の話から着想を得た小説『輸出』を執筆した。<sup>(45)</sup>これが一九五七年五月第四回文学界新人賞をとり、英一は文壇デビューを果たした。独特の海外留学制度があった南山大学からのオファーが、全く偶然ながら、作家「城山三郎」の誕生のきっかけとなったのである。

英一は同年末に名古屋から茅ヶ崎に移転するが、小説を執筆しながら、名古屋での研究・教育活動も継続するという二重生活を一九六三年まで送った。この間一九五八年、『中京財界史』への批判から派生した小説『総会屋錦城』<sup>(46)</sup>で、英一は第四〇回直木賞を受賞し、「組織と人間」をテーマとする小説家としての地位を確固たるものとした。

おわりに

本稿では、小説家「城山三郎」誕生までの杉浦英一のキャリアの可能性と選択、およびそのキャリア選択の一端に、南山大学経済学部創設がどう関わったかをみた。戦前においては、実家の事業を継ぐ可能性が高かった英一であるが、出征と敗戦によって道筋が変わった。一橋大学で特別奨学生となり山田雄三の弟子となった英一には、理論経済学の研究者という道が開けたが、英一身は研究者になることには消極的で、生来の文学、文筆への関心を強めていった。

大学卒業時に、実父の大病という偶発的事件に遭い、東京を離れて名古屋に戻った英一は、教員養成校の愛知学芸大学に就職し、

理論経済学ではなく地域経済史を内容とする講義をおこなった。その講義準備のための聞き取り調査が、小説『中京財界史』の執筆、発刊につながり、さらに後の直木賞受賞作『総会屋錦城』を生むきっかけともなった。

同時期、南山大学では経済学部創設に向けての準備が進んでいた。教員人事は、元々慶應義塾大学の協力を得る予定であったが、それが慶應の都合で叶わなくなり、急遽南山大学自身にわたることになった。当時英一は、名古屋大学の経済学研究会や文学文筆の同人活動のグループにも参加しており、おそらくその関係者から経済学部専任教員のオファーが彼の元に舞い込んだ。

英一はそのオファーに関心を示すが、条件としてあげられた単身での長期の教員海外留学は大きなハードルであった。英一は海外経験のある友人に相談し、そこで聞いた貿易会社社員の現状に興味を持ち、南山大学のオファーを断って小説『輸出』を執筆する。それが文学界新人賞をとり、英一は小説家としての大きな一歩を踏み出した。小説家を専業とするまでにはさらに数年を要したが、一九五六年の南山大学経済学部からのオファーは、偶然にせよ、彼の小説家への歩みを強く後押ししたのである。

註

- (1) 英一が自身の若き日を回顧するエッセイには、城山三郎  
 (一九九六)『花失せては面白からず——山田教授の生き方・考  
 え方』角川書店、同(二〇〇七)『仕事と人生』角川書店、同  
 (二〇〇八)『そうかもう君はいないのか』新潮社などがある。  
 特に、同(一九九六)「あとがきに代えて」の中で、英一は本書を、  
 「一つの自己形成史」と述べている。
- (2) 加藤仁(二〇〇九)『筆に限りなし 城山三郎伝』講談社、  
 西尾典祐(二〇一一)『城山三郎伝 昭和を生きた気骨の作家』  
 ミネルヴァ書房、植村鞆音(二〇一一)『気骨の人城山三郎』  
 扶桑社。本文における英一に関する基本的な事項は、これらの
- (3) 城山(一九九六)、四五頁。  
 (4) 西尾(二〇一一)、六五頁。  
 (5) 城山(一九九六)、四四頁。  
 (6) 同、一六頁。  
 (7) 同、一七頁。  
 (8) 同、一九頁。  
 (9) 同、三九頁。  
 (10) 同、四四頁。  
 (11) 同、四三―四四頁。

評伝を参考に行っている。

- (12) 同上。
- (13) 同、四五頁。
- (14) 同、四六一四七頁。
- (15) 同、四五―四六頁。
- (16) 加藤（二〇〇九）、九八頁。
- (17) 南山大学『昭和二九年度学生便覧』で山根は、担当する演習科目「英語研究」について「一九世紀英吉利浪漫詩人を中心として、Woodsworth, Coleridge, Byron, Keats などの作品を鑑賞する」と紹介している。また彼は、金城学院大学文学研究室岡田秀男が編集兼発行人となっている一九四九年一月発刊の『近代批評』創刊号に、「一九四八年の幻想」を寄稿している。
- (18) 正田健一郎「アメリカにおける日本近代化の研究―その動向と問題点（最近一〇年間における社会経済史学の発展）」『社会経済史学』第三二巻一―五号、一九六六年。
- (19) 杉浦英一（一九五六）「序」『中京財界史』上、中部経済新聞社。ここで英一が参照している論文の著者、タイトルはわからない。
- (20) 名古屋公衆図書館の後身とも言える名古屋鶴舞中央図書館には、同「むすびにかえて」『中京財界史』下、中部経済新聞社、一九五六年で、英一が触れている『東海新入国記』『世間はなし』などが所蔵されている。これらは、あるいは英一が実際に閲覧したものかもしれない。
- (21) 同上。
- (22) 本書はその後、復刻・統合版として一九八六年に再刊、さらに一九九四年にタイトル等を改めた、城山三郎「創意に生きる
- 中京財界史」文藝春秋が文庫本版として発刊されている。文庫本版には「文庫本のためのあとがき」が加筆された一方、元は挿入されていた企業家グループの図が省かれた。また、文庫本版第三刷は、名古屋商工会議所が中心となって二〇〇八年九月復刊したものである。同会議所は、翌年三月『城山三郎』創意に生きる 中京財界史』年表・索引』という、文庫サイズの全二〇頁の小冊子も編集している。
- (23) 城山（一九九六）、四八―四九頁。
- (24) 伊藤整『日本文壇史Ⅰ開化期の人々』（新装版）講談社、一九六八年、はしがき。
- (25) 『中京財界史』の問題点の指摘は、他にもいくつかある。『中京財界史』第四版に寄せた、一橋ビジネススクール楠木建「文庫版新装版解説」は、新聞連載ならではの構成や、各個の記述量の物足りなさをあげ、安保邦彦（二〇〇九）「城山三郎著『中京財界史』の歴史的記述の正誤問題について」『東邦学誌』三八巻一号は、執筆当時の資料制約を踏まえつつ、事実に関する記述の誤りを指摘している。
- (26) 林董一（一九六六）『名古屋商人史』中部経済新聞社の序文「名古屋商人とはどういうものか」において、『中京財界史』のこの三分類が紹介されている。
- (27) 新修名古屋市史編集委員会（二〇〇〇）『新修名古屋市史』名古屋市、四四―一四四二頁の第六章第一節「名古屋の経済的特質」は、「名古屋財界の構造と特質」を、英一の分類に沿った三つの企業グループでそれぞれ紹介している。

- (28) 堀田典裕(一九九五)「道德地区の形成過程とその空間的特質について：近代名古屋における郊外住宅地開発(Ⅲ)」『日本建築学会計画系論文集』第四七八号は、福沢桃助とその周辺の人間関係について、『中京財界史』を参照するように促している。また、小林延人(二〇〇九)「維新时期名古屋の通商政策」『歴史と経済』五一巻四号は、明治維新期の名古屋商人史について、やはり『中京財界史』の参照を促す。このほか、沼尻晃伸(一九九五)「戦間期日本の土地区画整理事業と都市計画——名古屋市の事例を中心として——」『土地制度史学』三八巻一号、鈴木恒夫、小早川洋一、和田一夫(二〇〇九)『企業家ネットワークの形成と展開——データベースからみた近代日本の地域経済——』名古屋大学出版会、橋口勝利(二〇一一)「一九二〇年恐慌前後の日本綿業——中京圏の綿糸取引信用をめぐって——」『社会経済史学』七七巻三号でも、『中京財界史』の記述が触れられている。
- (29) 後に英一(城山三郎)が発表していく小説は、当時の文壇の中では「組織の中で人間はどう生きるか、人間にとって組織とは何なのか」を問いかける「組織と人間」というテーマに分類された。城山(一九九六)、五八頁。第一章でみた戦時体験も、このテーマにつながっている。
- (30) 米国大使館文化交流局出版課(一九五六)『アメリカナ：人文・社会・自然』第二巻二号
- (31) 『中部経済学界』第四号、一九五六年
- (32) 城山(一九九六)、五六頁。
- (33) 西尾(二〇一一)、一〇八頁。
- (34) 永井英治(二〇〇四)「南山大学経済学部創設前史」『南山経済研究』第一八巻第三号、一九二一九三頁。
- (35) 永井英治(二〇一一)「南山大学経済学部 半世紀を超えて」『南山経済研究』第二五巻第三号、一〇一一頁。
- (36) 同、一二頁。
- (37) 南山アーカイブズ所蔵『昭和三二年度学生便覧』。
- (38) 愛知学院大学商学会編(一九九一)「山崎研治教授略歴・研究業績」『愛知学院大学論叢・商学研究』第三六巻第一・二号、三〇五頁。
- (39) なお、同年の南山大学における山崎の講義「近代経済学」は、『一九五六年度学生便覧』では「経済循環のモデル、国民所得の概念とその測定、国民所得会計、国民所得水準の決定、国民所得水準の変動、国民所得水準の安定」、『一九五七年度学生便覧』では「国民所得の循環的構造を社会会計の方法による解明」と説明されている。
- (40) 永井英治(二〇一一)、一四頁。
- (41) 加藤仁(二〇〇九)、七六―七七頁。
- (42) 注33、参照。
- (43) 「第二回『歴史への証言』社会科学部から経済学部へ」『NANZAN UNIVERSITY BULLETIN』NO.95、一九九一年一月、七頁において、経済学部名誉教授の戸田正志および斎藤隆助が、経済学部移行期の状況についてのインタビューの中で、話している。

(44) ヒルシユマイヤーのコラム「この人と」『毎日新聞』一九七四年一〇月三十一日。林順子（二〇一四）「経済学者・経営史家としてのヒルシユマイヤー」ヨハネス・ヒルシユマイヤー『工業化と企業家精神』日本経済評論社も参照のこと。

(45) 西尾（二〇一一）、一〇九頁。

(46) 研究成果としては、杉浦（一九五七）「地域経済に於ける予測モデル」『愛知学芸大学研究報告』第六号／社会科学Ⅴ、同

（一九五九）「投資効率の測定基準について——計画経済の二問題——」『愛知学芸大学研究報告』第八号／社会科学Ⅴがある。愛知学芸大学での教育活動は一九五八年から週二回の集中講義となった。休講をしないように努めたが、学生への指導は十分と感じていたようで（城山（一九九六）、五五頁）、二重生活の限界が感じられる。